日本大学の「ゼミ」における談話の分析

－話者が反論するための条件－

S16（カナ表記）
所属
学籍番号
科目：授業名
教員

目次

1. 初めに
2. 先行研究
3. 研究の資料と分析方法
4. 結論

要旨

本研究ではにゼミナールにおける話者の関係を分析された。分析の結果、話者が発言する時間が長いほど、相手が反論しにくい傾向がみられる。または、先生がコメントをする時も、発表者が反論しない傾向がみられた。本研究では、ゼミナールの問題点として話者が発言しにくい状況が作られる要因を明らかにし、効率を改善できるところが発見されたのである。

キーワード：ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、反論、発言の時間

1. 初めに

日本の大学で行われる「ゼミ」形式の授業において学生は、特に言葉遣いを意識しながら発言することを求められる。特に、丁寧さのレベルが存在する日本語には、言葉の丁寧さが会話の参加者間の関係を表す重要なポイントがある。ゼミ形式の授業で学生及び先生は敬語を使いながら議論を行うことは典型的なパターンである。ただし、言葉遣いが丁寧だからといって、議論・反論がそれだけに影響されるわけではない。

ゼミ形式の授業では、学生は自分の研究についてフィードバックをもらうこともあれば、フィードバックをすることもある。そして、長いコメントをする人もいれば、短いコメントをする人もいる。また、間違えたことを指摘されたり、相手の間違いを指摘したりすることもある。特に後者の場合、会話の参加者がどのようなときに反論し、どのようなときに反論しないのかが興味深いところである。

本研究の目的は、ゼミにおける人の発言の長さと相手の反応の仕方との関連性を明らかにすることである。会話における相手の反応を分析対象とするネガティブポライトネストラテジーは「…いわゆる丁寧さ、丁重さとして想起される…」のであり（三牧、2013 年）、

話者が相手と距離を置くために言葉遣いに気を付けながら、反論をするという意味を持っている。つまり、反論を言うときに相手の気持ちに傷をつけないように行われる戦略であり、反論をしやすい状況を作り出すものとして、今まで認識されてきた。しかし、言葉が丁寧であっても、その場で起きている状況が必ずしでも安定しているわけではない。むしろ、ゼミは議論が中心なので、意見の対立が多いし、実はそれこそがこのような形式の授業で求められている。本研究では、ネガティブポライトネスストラテジーの代案的な新しい仮設を試みるのである。

２． 先行研究

ウサミ(Usami, 2002 年)は Discourse Politeness in Japanes Conversation において会話における敬語の使い方が会話の丁寧さとどのような関係にあるかを説明している。分析の結果として、「話者による敬語、スーパー敬語の使い方は、相手との関係を表すというより、むしろ話者の個人的な特徴に強く影響されると指摘される。しかし、「…文章表現レベルでのグローバル・ディスコース分析において最も重要な発見とは、非丁寧形の使い方が話し手と聞き手の関係におけるパワーを表している」ということである。つまり、会話でパワーの強い方が非丁寧形を使うことが多い。したがって、パワーの強い方が反論を言う傾向が見えるはずだ。

それに対して Geyer (Geyer, 2008 年) は、会話の参加者が多数の場合、Face Threatening Acts（以下ＦＴＡと称す）が会話の当事者間関係にどのように影響を及ぼしているかについて述べている。会話の参加者が多数の場合、言語行動は、face-threatening でありながら、同時に face-enhancing でもある。特に、会話の参加者が多数である場合、collaborative disagreement が生じることが多い。Collaborative disagreement とは、二人以上の参加者が「反対のチーム」を作って、一定の言語行動への反応として FTA を行うことである。

以上の研究とは違い、本研究では、会話の参加者が一体どのようなときに反論するか否かを説明することを目指す。本研究を行うことによって、ネガティブポライトネスストラテジー説の代案として、発言の長さをキーコンセプトとして、日本の大学のゼミ形式の授業で話者が相手の発言にどのように反応するかを説明することを試みる。

３． 研究の資料と分析方法

本研究では、発表資料として、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミナールの 40 分程度の談話を文字化したものを使う。データは（授業日）に授業で扱った、文字化された資料である。

・<u>仮説：相手のコメントが長いほど、発表者は反論しなくなる。</u>

相手の発言が長く続くと、それを聞く側の受ける影響が２種類ある。ひとつはすべての情報を把握することが難しいので、質問に答える、あるいは相手からの指摘に反論する自信が低下することである。もう一つは、相手の発言が長いほど、無意識には議論する点について詳しいという、相手に精神的な影響を及ぼすので、それを聞く側が反論しにくくなる。以上の仮説及び分析に扱う概念を、以下の通り操作化する。

・概念の操作化

分析の対象は日本の大学で行われるいわゆるセミナール形式の授業なので、発表する人がほかの学生と先生から質問されたり、アドバイスをもらったりすることを前提としている。したがって、発表者以外の話者の発言を質問、アドバイス、反論と要約に分けて分析している。それに対して、発表者の発言を答えと反論に分けて分析している。反論というのは、単なる相手の言うことを否定するだけでなく、相手を納得させようとすることだ。つまり、自分が発表した内容の主張を正当化しようとすることである。

上記の定義に基づき、以下の通り分析を行う。

・(授業日）の資料の分析

会話の参加者は発表者 A、質問者Ａ１、質問者 A2、質問者 A3、質問者 A4 と先生である。

（授業日）の資料の分析

役は発表者、A,B,C,D である。

発言者	発言する時間	反応
発表者 A	14：33	発表
質問者 A1	01：07	質問
発表者 A	00：23	反論
質問者 A１	02：01	質問
発表者 A	01：20	反論
質問者 A1	00：39	反論および質問
発表者 A	00：45	答え
質問者 A1	00：42	質問
発表者 A	00：37	答え
質問者 A1	00：18	コメント
発表者 A	00：48	コメント
質問者 A1	00：24	コメント
質問者 A2	00：25	質問
発表者 A	00：50	答え
質問者 A2	00：13	質問
発表者 A	00：31	答え
質問者 2	00：12	コメント
質問者 3	00：19	質問
発表者 A	00：36	答え
質問者３	01：13	コメント
発表者 A	00：12	コメント
質問者 A1	00：10	質問

発表者 A	00：45	反論
先生 A	04：33	コメント
発表者 A	00：10	コメント
質問者 A1	00：31	コメント
先生 A	01：19	コメントと質問
質問者 A４	00：17	質問
発表者 A	02：14	反論
質問者 A1	00：12	発表者 A に対する反論
質問者 A4	00：14	発表者 A に対する反論
質問者 A1	00：28	質問
発表者 A	01：01	反論
先生 A	01：55	コメント
発表者 A	00：08	先生 A に対する質問
先生 A	00：07	答え

質問者 A１との議論において発表者 A も質問者 A1 も発言をするときにほとんど 30 秒以上、時に 1～2 分程度話している。結果、発表者の反応として中立的な答えがみられる一方、反論も見られる。そして、発表者 A と質問者 A2、質問者 A3 と質問者 A4 との話にも同じような傾向がみられる。発言の長さに大きな差がなければ、相手が反論することがある。さらに、質問者 A4 は、発表者 A の答えを一回聞いた後に反論をした。

しかし、29 分 17 秒の時点から先生 A が話を始めて、4 分 33 秒も発言をした後、発表者はそれに対して反論をせずに先生の話を聞くことにとどまった。しかも、先生 A は発表者 A の内容の多くの点について聞いただけではなく、発言する時間に差を発生させ、無意識に発表者 A に対して精神的な圧力をかけたのである。その結果、発表者 A は先生の発言に対して一回も反論を行わなかった。先生 A が発言するとき 4 点について質問をしたのに対し、発表者 A はそれに対する答え・反論も発言せずに議論が終わった。ゼミとその中心である「発表」という活動を最上効率的に行うために、学生が自分の研究で迷っているところをはっきりさせる必要があるので、その問題が解決できる環境、状況を作ることが課題として残っているのである。

４． 結論

本研究では、ネガティブポライトネスストラテジーを使った話者の間でも、対立した意見が表されることを明らかにした。そのために、今まで蓄積されてきたネガティブポライトネスストラテジーではなく、話者が発言する時間を従属変数とした仮説を検証してきた。結果として、話者の間で、発言する時間に大きな差がなければ、相手が反論することはあるのに対し、片っ方が発言する時間がきわめて多いときは、発言する時間の短い方が反論をしないということが言える。学生が研究で迷っているところをはっきりさせるために必

要なのは、話者が発言する時間のバランスを取ることである。そして、ネガティブポライトネスストラテジーは丁寧な言葉遣いで相手と距離を置き対立を避けて反論がしやすい状況を生み出すことを目的としているが、実は必ずしもそうなるとは限らない。それより、話者が発言する時間が、相手の反応の仕方を説明する要因として有効だということを示してきた。ただし、本研究は、あくまで一つの事例を分析したものであり、ここで主張される理論を一般化するために、更に大きいデータベースを使った研究が必要である。とはいって、大学のゼミが一体どのような状況で、そこにどのような力学が存在しているかを説明する試みとして、本研究は言語や教育などの分野で活躍する研究者に何らかの示唆を与えられれば幸いである。

参考文献

- 三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析 - 初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版。
- Naomi Geyer (2008) Discourse and Politeness, Continuum.
- Mayumi Usami (2002) Discourse Politeness in Japanese Conversation, Hituzi Syobo Publishing LTD.